

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究（B）（1）、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

10 小池 聖一氏

こいけ せいいち 広島大学・総合科学部・助教授

日時：一九九八年九月二十五日

出席者：伊藤隆 伊藤光一 季武嘉也 梶田明宏 中見立夫 小宮一夫

矢野信幸 武田知己

伊藤 今日は遠路はるばる広島大学の小池先生にお出でをいただきまして、貴重なお話を伺おうと、こういう次第です。いつもの事ですが、小池さんは能弁でいらっしゃると思いますので、質問の時間がないほどお喋りになるのではないかと考えております。その場合は少し時間を延長して質問できるようにいたしますが、途中で質問をどんどん差し挟んでいただきたいと思います。能弁ですから、口を入れるのはなかなか難しいんですが、そこは適宜うまくやってください。では、よろしく願います。

小池 きょうは、伊藤先生から「ちょっと報告をしてこい」という事で、歴史史料遍歴というお話しをしようと思います。私が中央大学から外交史料館、広島大学という経歴の中で、どのように史料と付き合ってきたか。特に、未公刊あるいは未公開の史料を中心にお話ししようと思います。ただ、そのような史料との付き合いは、非常に貧しい自分の研究生活の履歴でもありますから、報告するのは恥ずかしいというのが実態であります。

まず中央大学時代からですが、学部の段階から防衛研究所の資料室に通ってましたし、国立国会図書館憲政資料室でも、財部彪日記を読んでいたというまた、伊藤先生と御一緒させていただいた海軍歴史保存会の仕事の関係で、防衛研究所所蔵の戦時関係書類を、第一次世界大戦の海軍関係の史料ですが、これも全部読んだという経験がございます。それ以外で、事実上未公刊となっている史料がいくつかありまして、中央大学時代に付き合ったのが（2）～（5）の史料です。一つは、金子八郎氏の旧蔵戦時関係資料です。これは、北九州大学法学部に行かれた小林道彦さんが中心になって整理されたものです。基本的に慶応大学の村上義一文書や、小田原市立図書館にある山崎正幹文書と対になるような史料でありまして、戦時期、昭和17年～19年までの植民地関係、特に鉄道関係の史料を中心としたものを整理いたしました。

次に、アルバイトで少し関わったんですが、中央大学の大学史編纂室の所蔵文書

では、現在、中央大学史料という形で、菊池武夫文書について日記と書簡は公開されています。それ以外のものとしては、花井卓蔵文書。この花井卓蔵文書は量的にはそう多くありませんで、書簡もはがき類を中心としたものですが、100点ぐらいだと思います。それから長谷川如是閑文書。長谷川如是閑の原稿類を中心としたもので、結構な量があるはずですが、これらのものが中央大学の大学史に所蔵されている文書です。

それ以外のものとしては、中央大学時代は海軍を中心にした政軍関係をやっていた関係上、小島秀雄関係文書を手に入れたという形になっています。手に入れたというか、日独関係史研究会という研究会を作り、故小島秀雄氏の御子息が神父さんをされていました。小島尚徳さんという方で、もう亡くなられたんですが、その小島神父さんのところに、勤務日誌と日記、10年、17年、13～15年のメモ、17年のメモがありまして、これを入手し解説してまいりました。これに関しては、伊藤先生が中央大学に来られた時に報告させていただきました。

基本的にどのような内容かといいますと、防共協定の成立過程と、日独軍事同盟、その時には軍令部第3部第7課の課長でしたから、その辺りの史料を中心としたものです。スパイであったハックのいわゆるハックメモと言われているものと、駐日ドイツ海軍武官であったベネカーという人物がいますが、三者の日記と合わせると非常にいい内容になります。ただ、防研には、これ以外に近藤信竹等の日誌があります。これを合わせればもっと面白くなると思うんですが、その後、自分の研究の関心がうつって、これはこのままという形になっています。

伊藤 小島さんのものは。

小池 ご遺族。お姉さんがいらっしゃって、そのお姉さんは亡くなられたんですが、その息子さん（井上真氏）のところに所蔵されています。見たいといってお手紙を何回もしていたり、重要な史料ですから、出来ればどこかに寄贈していただけないかというお話をずっとしているんですが、ご本人が、今会社勤めで、御忙しくされ、整理もままならないとおっしゃられていて、ご自宅の方に入っています。ただ、あるものがこれだけではないようで、戦後の日独協会の関係の日記などもあるようです。私が持っているのはコピーなのですが、「コピー版に関してはどのように扱っても結構です」と言われてはいるんですが、それ以外のものについては全容が分かりません。もうひとつは、小島さんの持っていた日独関係史に類するような蔵書類がどうなっているのかよく分からないという事になります。

ここに書かなかったんですが、中央大時代には牛場信彦さん、牛場さんの奥さんと家族付き合いがあったものですから、戦前のものは何もないんですが、敗戦後から亡くなられるまでの牛場さんの備忘録があって、それを一回見せてもらったんですが、丁度3年前ぐらいから、伝記を作るという事で伝記作家に渡していて、今は

ちょっと所蔵していないという事です。誰と合ったかという簡単な備忘録です。中央大学時代はそのような文書と付き合ったという事です。

外務省の外交史料館時代になりますと、研究のための史料という付き合いかたではなくなつて、史料編纂という事を生業とした関係上、そのような史料の情報を得始めたという事になります。私は昭和3年もかかわりましたが、昭和4年、昭和5年、昭和6年の対中国関係の編纂に担当してまして、その中でも中国本土。いくつかに分け方があるんですが、それまでの系譜では満州東北、それから中国本土、いわゆる中国関内と言われるところ。それから対中国经济政策という3つの柱だったんです。それを一緒にやっていたのが、現在、広島女子大学にいる松重充浩さんです。松重さんと私はほぼ同年代という事もありまして、また、入った時期も8ヶ月違いという事もありましたので、二人で一緒にやったんですが、彼が中国東北を中心とした日中関係、私が経済関係を中心にして、その間は二人でやっていくという事で仕事をしました。

編纂のやり方としては、それまでは単純な交渉史を中心としていたんですが、私と松重さんの場合には、交渉史ではなくて現地状況、いわゆる政策を執行されるにあたって現地状況がいかんにか反映されるか、あるいは政策が立案されるにあたって現地状況がどうであったのかという史料をふんだんに盛り込んだ編纂を心がけたわけです。この3つに関しては解題も書きまして、私達としては一生懸命やっていた仕事です。

その過程で、僕と松重さんは全体状況の中で編纂を位置付けるという事を強く意識したものですから、全体的な史料状況の中で補完していくことを考えました。それで伊藤光一先生にお世話になりまして、憲政記念館に所蔵されている重光葵文書を見せていただいて、外交文書の整合関係を含めて、これは「外交史料館第7号」に紹介みたいなものを書いたのですが、それを合わせながら編纂するという事をいたしました。われわれとしては、その後も編纂が続くと考えておりましたので、史料の補充ということを非常に重要視しまして、ここにおられる武田さんに今後やっていただくのではないかとと思いますが、都立大学の松本忠雄文書の調査も少しいたしました。松本忠雄は外務省の財務次官、あるいは参与官、政務次官を行った人物なんですが、彼は外交史に関心がある代議士であったものですから、秘書を使って古い文書を写させていたんです。それが今、松本文書という形で一部外交史料館に保管されていて、日英同盟関係の史料は松本文書で代替えしたという歴史的な経緯があります。それ以外でも、彼は執務に際して回覧した資料を家に持って帰る。省議などの決裁文書もあったんですが、家に持って帰られている資料が結構あります。それは将来的に編纂に重要であると考えております。

外務省外交史料館の史料は「MT」という分類番号になっている明治・大正期の

史料と、「S」資料と言われている昭和期の史料と大きく二つに分かれていて、特に極東軍事裁判の過程で昭和期のものを中心に消失しているのが実状です。1942年（昭和17年）の火災で焼けたのは、調査部と通商局、会計課の一部が所蔵していた655簿冊です。そのうち昭和期の記録と言われているものは35冊。実際には、占領軍が接收する前、敗戦直後に焼いたものが4,000から5,000冊あります。この4,000から5,000冊の中心になるのが、日中戦争期以降の史料です。今現在、A・1・1・0・30という『支那事変関係一件』という外務省記録があるんですが、敗戦時に局長、課長クラスには家に執務関係資料を持って帰らせるんです。それは、何かあった時という事で家に持って帰らせたんですが、敗戦後に公文書を焼いてしまった後、弁護をする材料がないのはまずいという事に気付いて、それをもう一度集めて編纂し直したものが、A・1・1・0・30です。ですから、外務省記録の場合、基本的には本旨に相当する決済書類が入っているのが普通なんですが、A・1・1・0・30だけは草案段階のものが非常に多く含まれているのが特徴的です。

外務省の書類は、『日本歴史』1997年1月の584号にちょっと詳しく書いたんですが、基本的には、外交案件ごとにファイルを作っていて、外交案件の発生から結末まで、一件態というのが基本的な枠組みとして作られています。ですから、その過程での決裁書類を中心にに入れるんですが、その決裁書類が作られるまでにはいくつかの写が出来るわけです。その写は捨てて、本紙だけでちゃんとした簿冊を作っていく。これを戦前の場合には「編纂」と呼んでいたんですが、そのような編纂であるべきなんです。しかしA・1・1・0・30はその過程の草案だけで作られているのは、今お話したように、東京裁判時の状況により作られているからです。

それから、史料と文書の問題。編纂をやっていて特に考えたのは、昨今、「歴史の再評価」だとか非常にはやりですが、歴史資料の持っている、特に公文書の持っている固有の情報というか、そういう歴史的情報の部分は一つ重要だと思うんです。外務省編纂の時にも常に言っていたんですが、そのようなものも重要だ。しかし、評価というのは再評価にたえられるかたえられないかという理屈もありますが、もうひとつは、公文書の場合、既成の過程でいくつかの情報が入っている。例えば決裁だとか削除、訂正が非常に入っているわけです。ところが、昭和3年までの中国のものも含めて、『日本外交文書』にはほとんど削除、訂正が記載されていないんです。削除、訂正は、大きなもの、歴史的な価値のあるものは基本的には備考欄でとる形になっていたんですが、われわれは、それはよくないんじゃないか、もっと削除、訂正というものを多くしていこうという形で、決裁のあり方も、大臣決裁なのか次官決裁なのか、半公信のような課長決裁のものなのかによって文書の性質が変わりますから、決裁も含めて書かなければいけないというのを強く主張していた

ので、そのような編纂を心がけたつもりではあります。ですから、文書自体の生成から来る情報も重要だと考えています。

それから三つ目が、外交史料館報に「通商情報の伝達」という研究ノートを書いたのですが、文書がどのように伝達されていくのか。特に、大正9、10年を念頭に書いたのですが、第一次世界大戦後の通商情報がどのように外務省を経由して、それが地方公共団体、当業者という流れがあって、その当業者からの流れが、文書情報というものがいかに外務省の政策に反映されるか、外務省で国内出張を一回させてもらった事があって、そのときに、大阪市立大学附属図書館にある文書を使って、大阪市史編纂の時の文書ですね。大正9、10年しかまともな史料がなかったのですが、大正9、10年と重ね合わせて外務省の文書と話をして、伝達という事が分かった。

4つ目が、今日話をする最大のポイントになってくる森戸辰男文書と同じなんです。保存形態からくる史料群の意味という事です。

今言った四つの観点は、外務省時代にある程度考える事が出来たのではないかと考えています。編纂も松重さんみたいに中国近代史の非常に優秀な方と一緒にやらせていただいたので、お互いに啓発するところが多くて、私にとって史料館時代は非常にいい時代だったと思います。

そのときに、これは本研究会にも一部目録を寄贈したんですが、自分が未整理のものとして、実を言うと外務省外交史料館には、今公開しているものだけではありません。未整理の一つとして、私は「海軍省等如何南方軍政関係資料」に手をつけたんですが、何故これに手をつけたかという、一番保存状態が悪かった。私が海軍をやっていたという事もありますから、これから史料の整理に取りかかりました。これを3年くらいかけて、昼休み時間とか。放課後ではないんですけれども、閲覧時間後の記録整理の後に、閲覧室長の許可を貰って、コツコツと3年間整理した結果でありました。

南方軍政関係資料の来歴という事を書いたんですが、外務省で軍政関係で引継ぎをされて、移管目録を作った段階で移動があって、いわゆる外務省の中で調査課とか調査部という形で流れる中で移動があって、それから外務省に移ってきたという事です。目録全体が公開できないものなんですけれども、実際見れば、文書番号というのは書類目録で、南方軍政関係は253番～273番なんです。ということは、前も後ろもあるはずだという事になるわけです。しかし、慰安婦問題の流れの中で消し飛んだというのが実態だと思います。

外交史料館の大きな問題点は、外交史料館の文書は戦前戦後に関して、外務省の所轄部局が整理をして、簿冊化し、それを記録室に持って行って、その記録室が色々な担当部局のものを併せて一つの簿冊を作って、一件態が中心としながら雑纂、雑

件という形で分けて、のちの外交案件をする時の参考書類にしていくという意図があって「編纂」していたんです。それが外交史料館に移った過程で、それは外交史料館の問題でもあるんですが、補完する材料が移管文書中に出てきたと。例えば拓務省の史料。拓務省は大東亜省から流れ出た史料ですね。それらを強引に混ぜ込んでしまったんです。今までの一件態に強引に混ぜ込んでしまったために、史料としての一貫性が基本的になくなったんですが——。

伊藤 編綴し直したわけですか。

小池 そうです。ですから、昔の目録にはない簿冊とか。A B C D E と分かれているんですが、A門が二国間外交、B門が他国間外交、C門が軍事関係、D門が司法関係で、Eが経済関係です。A門、B門、特にC門が戦争関係でも一番問題になるという事で、A門とC門が徹底的に焼かれているんです。A門は、そういう意味で補充の最重要課題であって、外務省のO Bから補充して、C門は補充が利きませんから、そのままになっています。ただ、C門で、接收されてアメリカが持って行って、まだ中国関係のものは返って来てないんです。返って来てない簿冊が2、3冊あるはずなんです。E門が経済関係門ですが、どうもGHQを持っていかなかったんです。経済関係は戦時関係とあまり関係ないと思ったらしく、どうも日本に存置されたと僕はふんでいるんですが、大野さんなど皆さんの話だと、E門が残されて接收されていないようなんです。一応番号は振られているけれど、接收されていないものが結構ある。接收されていないという事もあるし、また、焼かれもしなかった。通商関係、つまり同じ問題であっても、通商局と地域局課と決裁書類が上がってきた時に、それぞれ多国間外交、二国間外交と分けましたから、同じ文書が入っている場合があるんです。ですから、編纂をやる時に、われわれは特に満州事変前の状況だったんですが、E門の史料を非常によく見まして、E門の中から相当数補充しました。実際もそうですし、E門もそういう形で残っていたものですから、そのなかに後で仕入れたものと移管されたものを突っ込んだという形になっています。ですから、元は編纂番号にないのにE門0項というのがあります。E. 0. 0という形で入っているものがあるんですが、「0」という項目は戦後作られた項目で、そこに入っている史料のほとんどは、そういう形で作られた史料です。ですから、史料全体の一貫性から考えると、あとにE. 0と言うのを新設して作ったということがあるので、そこをちょっとスクリーニングしないといけないだろうとは考えています。

南方軍政関係資料の場合には、読んでいただければ分かるんですが、防衛庁の史料と非常に相関関係があって、合わせると一つの海軍南方軍政がよく分かる史料群でありました。それを整理して公開したという事があります。ただ、公開にあたっては苦勞しました。外交史料館としては、公開する事に消極的でした。理由は、す

でにすべて公開しているという建前なのに、新たに整理して史料が出て来たという事になると、まだ未整理のものがあるじゃないかと人に言われるという事が第1点。第2点が、うちは外務省の史料を扱っているのに、なぜ海軍省から移管された南方軍政関係の史料を公開しなければならないのかという事。3番目が、そんなことをやったら仕事が増えるじゃないかという三つの問題点がありまして、私としては、そういうことはない、この史料を出しても面倒な事に巻き込まれない、という事で行動しました。実際に南方軍政関係資料の場合は面倒な事に巻き込まれる事が多いわけです。戦後の賠償問題とか精算事業の関係で、朝鮮の色々な業務だとか、また債権者がいるという状態で、それを公開すると新たな債権になって国庫負担になるみたいなどころがあります。このため、ちょうどそのころ今亜細亜大学国際関係学におられる柴田善雅さんと懇意にしていたんですが、柴田さんに「この史料を出すのはどうでしょうか」と理財局に聞いてもらって、「大丈夫だろう」というお墨付きを貰って、つまり他部局の機関のお墨付きを貰うと価値が出るわけです。それから、防衛研究所の高橋久志先生、今は上智大に移られました高橋先生にその話をして、史料を出す事は防衛研究所としても望ましいというお墨付きをいただいたり、各方面からお墨付きをいただいて、他機関も希望しているんだという事で、公開しました。

3番目が川村茂久事務官日誌。これは柴田紳一さんが『中央公論』で前に公開された史料です。これは昭和7年の日記と書かれています。他に、川村茂久が担当官としてその当時持っていた文書群があるんです。書類の作り方は、役人ですから、自分が担当したものに関しては記録を取っていきます。僕も辞めるにあたって相当捨てさせられましたけれども、たとえばどういう文書を作成していった、草案も含めて、起案責任がかかってきますから、自分の起案した文書を残しているんです。そういう資料群があります。これを河村一夫さんが閲覧室長の時に、公開しようとされたんです。そのときに、もう一度今あるA門、B門、C門にあわせて、それをばらしていれようとされたんです。それで「河村ファイル」と言われているものがあるんですが、彼の場合には、来歴を書いて簿冊を作っていかれたんですけれども、その作業が彼の定年と共に途中で終わりました、一部は「河村ファイル」という形で現存のものに入ったんですが、大部分が事実上未整理という形になっています。

伊藤 今、誰が『中央公論』でと言った？

小池 柴田さん。

伊藤 塩崎君じゃないか？塩崎君は、外交史料館の持っていない部分を遺族からコピーして、外交史料館にあるのは昭和7年の日記だけでしょう。それ以外を彼が…。

小池 国学院大学の柴田さん、やりませんでしたっけ。僕の記憶では何かでやったような記憶があったんですが。

伊藤 違うと思います。

小池 外交史料館には7年があって、それ以外で、書類は外交史料館にあるんです。

伊藤 この日記は公開されているんですが、されていないんですか。

小池 言えば公開します。外務省の場合、言えば公開するものがあります。GHQがマイクロフィルム化したもので目録化(チェックリスト)されていないものもあるんです。たとえば履歴ですね。戦前の外交官のすべてが履歴が整っていて、それはなかなか面白いです。重光元外相の足は上海事変で一本失われているわけですがその時のレントゲン写真も入っています。それは遺族も含めた紹介があった時には出すというものです。ですから、遺族の紹介があれば出す。ただ、毎年、職員録を外務省が出してしまして、この明治期、大正期のものに関しては、クレス出版から佐藤元英さんが職員録を出したんです。ところが、昭和期も当然ありまして、昭和期の履歴が書かれています。ただ、履歴の取り方が、外務省の内示日が記載されていて、実際の官報掲載日とちょっとずれがあるんです。正式辞令は官報掲載日ですから、そこに大きな問題点はあるんですが、基本的には外務省の履歴に当たるものが出ています。

中見 一つよろしいでしょうか。外務省の文書の戦後の接收というのは、アメリカに持って行ったんですか。日産館で進駐軍が、マイクロに撮ったのでしょうか。陸海軍文書はアメリカへ持って行っていくのでしょうか。結局、何通か返っていないというのは、日本国内で調査を行い、写真に撮って、その時返ってこなかったという事なんでしょうか。

小池 ちょっと話は錯綜したんですが、一つは、敗戦直後に内務省から外務省にどっと移管されたと思われまます。つまり、これはおれたちの管轄じゃないからという事で移管されたわけです。たとえば、南方軍政関係の史料がそうでしたけれども、そういう形で移管されたものもあります。それは日産館、合同庁舎みたいな形で入っていますから、そのような中で外務省の書庫という形で一体になっていたんだろうと思います。ただ、それらのものを見ますと、アメリカ軍が接收した時には必ず通し番号をつけますね。その判子がついていません。判子がついていないという事は、アメリカ軍は接收しなかったと思います。つまり、今、僕が言っているものは、接收をせずにそのまま外務省のどこかに置かれていて、あるいは占領軍の関心の対象外だったんだろうと思いますけれど、接收を免れてそのまま移っていったと思います。

中見 2冊…

小池 C門ですね。C門に関しては、他のものと同じように接收をしまして、A門からC門までは、基本的にアメリカは持っていっています。C門の中国の軍事関係は戦後に連続していきますので、そのものに関しては分析途中だったのかもしれま

せんが、返ってきていないという形になって、現在も多分アメリカのどこかにあるんではないかと思います。

中見 昔、栗原健さんか誰かに聞いた時、陸海軍文書はアメリカに持っていったけれども、外交文書に関しては日本国内で撮影をやったという風に理解しているんですが。

小池 撮影はそうなんです、ものによっては持っていつているんです。それで返ってこないものもあるわけです。ただ、向こうからの返却方法にはいくつか問題点がありまして、たとえば防衛庁の戦史部では、昭和7年の陸満密下日記は7年分が欠けているんです。それは接收されて戻ってきたんですが、最初に返ってきたものの中には、防衛研究所のものが入っていないくて、後に国立公文書館に返されたものに入っていて、所管をめぐってもめているところもあります。ですから、接收されて、返還される過程で結構色々な事があったんだろうとは思いますが。

伊藤 外交関係のところいくつか質問があるんですが、一つは石射猪太郎文書なんですけれども、石射さんの遺族は外務省に寄付したというんですが、外務省へ行きましたら、ないような話をしたものですから、いろいろごたごた言ったら誰かが思い出してくれまして、なんとかという簿冊に目録が入っているというので、その目録を出してもらいました。そうしたら、バラバラにして簿冊の中に編綴してあるんですね。それで僕は、もともと外務省として編綴したものと、外交文書の、つまり編纂に当たって編綴したものと、どうやったら区別できるんだろうかなという事をお伺いしたいと思ったんです。何か分かるわけですか。

小池 正直申しまして、現実的には、私文書を含めて大事に保管していたり、残していくという発想がなかったですね。ですから、書籍類もいっぱい移管されていて、後でお話する大橋日記は、移管された書籍の中に紛れ込んでいたんです。一部、昭和14年のものが。それで遺族の方にあるんじゃないかと問い合わせたら、あったという事になるわけですが、そのように目録としてちゃんと残っているものが少ないんです。つまり、編纂のためにもらったんだという話です。編纂のために集めたんだから、私的な文書であったとしても、それは外務省の書類なんだからという事にしてばらして入れます。ですから、それがその人の履歴を含めて再現するような個人文書だという発想がないものですから、そういう史料や記録は、完全に、昔、編纂官であった人達の記憶に頼るしかないというのが現状だと思います。

伊藤 他の諸家文書も、大体そういう風になっているわけですか。

小池 そうですね。ただ、私文書の中でも編纂の中に入れられないもの。たとえば書簡類だとか、そういうものに関してましては別置されています。

現在、特にそれを精力的に整理しているのは冨塚一彦君です。

伊藤 それと、さっきちょっと大東亜省の話が出ましたが、大東亜省が解体したと

ころで外務省に全部史料は移管されたのでしょうか。

小池 確認はとれません。大東亜省の史料というのが、大東亜省の簿冊という形であるものを外交史料館の中で見た事はありません。ですから、よく言われている事ですが、外務省と同じ建物に入って、書庫も同様に使っていましたから、多分、大東亜省という形で使っていた資料は執務史料に限られたんだろうと思います。大東亜省の執務資料は敗戦時に殆ど焼いていると考えられますから、それが書庫まで回って、編纂に回されたものは非常に少ないだろうと考えます。

ただ、大東亜省の執務の時に、大体外務省と同じような組織ですから何をするかというと、執務でいろいろな資料がたまっていく。一件の問題が出てくる。すると、それをパンフレットみたいにしてまとめます。端的にこれを調書というんですが、たとえば議会調書もその一つの形態ですし、今でもそうなんですが、白い表紙の冊子形態にするんですが、その調書は公文書館にあるはずです。

伊藤 それは公開されていない。

小池 と思います。僕が行った限りでは、公開された感じはありません。

伊藤 もう一つ、今、児玉秀雄の文書の整理をやっていて、外交電報が非常に沢山入っているんですが、外交電報を見ていると、どこどこに転電せりと言うのが出て来ますね。陸海軍、彼は関東長官でしたから、満鉄その他、総領事館とかいろいろところに転電している、あるいはそこから転電を受けているわけですが、転電というのは、どこからどこへどうするかと言う仕掛けがきちんとあるものなんですか。

小池 仕掛けはあります。今のテレビ放送と同じで、キー局、ネット曲と言う形になっていまして、東京が発信地であれば、北京から管下の領事館に転電すると言うネットが出来ています。ただ、転電の整理や転電に関しては、発信者が、特に中央なんですが、中央の外務省本省がここに知らせればいいという事で、転電先を指定します。たとえば奉天へ出すとか、そこの総領事館から分館などには、また流すと言う形態です。

伊藤 総領事館から外務大臣宛の電報を、たとえば関東長官が転電を受けている事がありますね。すると、それぞれの出先で、ある程度随意に関係がありそうだなというところへ転電する事が出来たのかなと。

小池 できました。特に、協議先と言うのがありますから、案件にあたっては地域的な対応をしなければいけない案件が結構ありますから、そういう場合には、返電なんかの場合にもそういう形で転電するという事は当然有り得ます。中央から再送する事はほとんどありません。

外交史料館時代に、先ほど申しましたような形でいくつか見てきまして、広島大学に移ってからですが、広島大学では大橋忠一日記。これは松岡外務大臣の時に次

官になりまして、満州国時にはハルピン総領事から外交部司長という形で満州国に入った人物です。彼の日記、昭和14年のものだけが外交史料館にありまして、その関係から遺族の方に聞いてみると、どうもあるという事でコピーを貰ったんですが、それが昭和7年、北鉄交渉、ヤルタ会談関係、戦中から戦後のものです。それから疎開期の随意日記と昭和14年と蒙古日誌というものがあります。昭和7年のものは、満州国の外交部の設立関係で非常に面白い史料。北鉄関係は、東支（中東）鉄道の譲渡問題にかかる満州国の関わりのものです。昭和14年は、満州国の退官後に、中国を来たから南まで全部回って、その過程で呉佩孚との会談等がよく書かれている。呉佩孚とか、海南島の瓊崖臨時政府との要人たちの会話も入っていて、そういうものなんです。僕が中心に読んだのは昭和14年なんですが、本当はまだ起こさなくてはいけないんですが、まだ100%起していませんで、昭和14年のものなどは、満州国もそうなんだけれども、中国支配のあり方は点と線でいいんだと。面的な支配なんてもともと考えていない。点と線で問題だと言うやつがいるけれども、人間と同じで、血液の流れだけ押えてやればいいんだという事が書かれている。ある意味で、日本の満州国に対する認識や、中国に傀儡政権をつくっていく過程の考え方が非常に端的に出ていて面白い史料です。ただ、通してあるものでもありませんし、一番面白いであろう昭和16年の史料がないという非常に大きな欠陥を抱えているんですが、これをちょっと手に入れました。

伊藤 所蔵はどこですか。

小池 ご遺族です。今からお話するのは、全部、ご遺族のところにあります。

2番目は阿部勝雄日記です。故阿部勝雄氏は海軍の軍務局長として最後は中将で終るんですが、三国軍事同盟の時の軍務局長です。その史料です。特に中国関係のものがあって、日記は大正12年から昭和23年まで全部揃っています。非常に膨大な。

伊藤 記述は。

小池 結構細かいです。僕もあまり読んでいないんですが、きっちりしています。ご遺族は、お酒が好きな方なものですから、広島酒どころの酒祭の情報とか、最近も絵葉書を送ったりして非常に喜ばれておりますが、これを使ってまだ研究しておりません。

それと同時に集めたんですが、これも日独関係史研究会。その研究会で集めたのが横井忠雄日記です。横井忠雄も駐独武官だった人物で、昭和14年11月15日～16年8月まで、それから18年8月～12月の日記が存在しています。

伊藤 これは重複しているわけ？

小池 重複しています。記述も重複しています。どうしてこうなったか理解は出来ないんですが、重複しています。これが広島大学時代に、未刊行、未公開の史料で

す。

伊藤 どうするつもりですか。

小池 自分としては、しかるべきところで公開、あるいは移管という事を考えているんですが、大橋忠一日記に関しては、中見先生のところでお金を出すといっていたので、史料集として出していただけると言う話は前々からされていてながら、後回しにしちゃったもので（笑）。それで、これは起して出すという事を考えています。

「阿部」と「横井」に関しては、研究会主体で動いていますから、私の一存では動けません。ただ、阿部勝雄も横井忠雄も枢軸派という事で非常にネガティブな評価を受けた。そのことで、特に阿部勝雄は日記を少し読んだんですが、日記を読む限りでは枢軸派で動いたことはないわけです。枢軸派で動くと言うよりも、日頃のルーティンワークの中で、いかにドイツを利用すれば日本軍にとってうまく行くかと言う話しか考えていないわけで、たとえば大島浩などのようにヒトラーの虜になって動いたタイプとは全然違いますから、いわゆる海軍中堅層に対するネガティブな評価があって史料を出しにくいんだと、親父の遺志とか、そういう形で叩かれるのが嫌だとか、そういうこともあって出したいくないということがあったと思います。ものもいいものですから、ちゃんとした所蔵場所があれば、そういう風には考えています。

ただ、去年も今年も、憲政資料室の書庫まで学生と一緒に見学と言う形で入らせてもらったんですが、正直言って整理と保存が悪い。あそこに置いておいたら問題なんじゃないか。端的に言って、整理してから持っていかないと駄目だろうと思います。整理をして持っていくなればあそこでもいいけれども、なんとなく…と言う気がします。そこがあって、どうしようかなとは思っています。

伊藤 憲政資料室は今、非常に官僚的になっちゃって、僕もこの前、木戸幸一の関係文書の一部が後から少し出てきて、それをマイクロフィルムに撮って、全部、歴史博に現物が入っているから、そこでマイクロを撮ってから、向こうに渡そうということで木戸さんの了解を得て作業を進めることにしたんですけども、そのやり方が非常に官僚的だったものですから、木戸さんを怒らせちゃいまして、「絶対許さない」ということになって、頓挫してしまった。

それから、この間、ある骨董屋から伊藤博文関係文書の一部が出てきまして、親切に教えてくれて、伊藤博文の伝記を作った時のタイプ版の中に入っているものかと思って見に行ったら、全く重複がないんです。ですから、伝記を作る前に流れたものだろうと思います。かなり貴重な手紙や外遊日誌などもあるんです。それで電話をしたら、「残念ですが、今年はまだ予算を全部使っちゃいましたので」という話で、僕はちょっと怒りまして、「そういうことで良いのか」ということを怒鳴っ

たもんですから、向こうもビックリして、「どうしたら良いか」というから、「上司に話して、なんとかお金を工面して買いなさい」と言うことで、今進めているんだろうと思いますが、全然連絡もしてこないし、どうなっているのか分からない。今、そんな状態ですよ。ですから、あそこに入れるのは危ないという感じがしますね。

小池 スペースが殆どないですしね。

伊藤 いや、あるんですよ。

小池 作れば沢山ありますけど、新館を作ったんですが、2004年か2010年に満杯になるということですし、憲政資料室の方は事実上先細りだろうなという感じでしたし、国立国会図書館自体が専門職員を作らないという体制に入りましたから、3年ごとに異動することになれば事務の引継ぎもうまく行かないだろうし、そうなってくると、大きなコレクションの場合には3年も4年もかかって整理するようなものが沢山ありますから、そういうものの整理には適さなくなったという気はします。今あるものの補充だけでもきっちりやってくれることの方が良いのであって、今後、後でお話する森戸文書みたいに大きなものに関しては、整理する能力はないんじゃないかと思います。

伊藤 ではメインイベントの森戸辰男を。

小池 今日、分厚い史料のほとんどは森戸で占めています。現在、森戸辰男文書の整理を広島大学でやっています。森戸辰男文書研究会、最近は森戸文書研究会と略称しているんですが、それをつくって整理をしている段階です。

森戸辰男は森戸事件で有名ですが、広島大学の経済学部の助教授の時に森戸事件が起きて追われて、そのあとは大原社研に入って、戦後は日労系で日本社会党に入って、日本社会党から片山哲内閣で文部大臣になる。引き続き芦田内閣で文部大臣をやって、その後、森戸・稲村論争に破れて日本社会党を辞め、新制広島大学の初代学長になった。13年間にわたって学長をやって、その後、中央教育審議会の委員長やNHKの放送学園などいろいろな職歴をもって、昭和59年に亡くなられた方です。97歳で亡くなられているんですが、ほぼ全生涯にわたる資料が、基本的に森戸辰男文書としてあります。

「文書学的一考察」と書いてあるので、詳しくは読んでいただければ分かるんですが、昭和38年、46年、51年に2回にわたり、全部で4回にわたって寄贈されています。ところが広島大学は、社会主義、社会問題関係の書籍は、法学部に興味のある先生がいらっしやったこともあって、『資本論』の初版本もあるものですから、その整理は目録としてあったこともあったんですが、文書類の整理はされずに、平成7年ぐらい、私が広島大学に移った時には、貴重書庫室の壁際に野づみにされている状態でした。私は史料館の出身ということもあるものですから、人の

ところに行けば本箱を見ますし、これは研究者のいやらしい性なんですが、また、書類を開けてみたくになりますよね。必ず最初に行くところは貴重書庫だったんですが、そこで野づみされているのを見まして、そこから私が個人的に整理をし始めました。大学で、学長科研というのがあると知って、それから東大百年史で伊藤先生も一緒に仕事をされた羽田貴史さんという先生がいて、大学財政史の先生なんですが、その先生が中央教育審議会関係の史料だけは森戸文書から抜かれて、大学教育センターにあったものを整理されていて、それと合体する形で整理を始めました。

現在、森戸辰男文書の整理をしているんですが、実を言うと2回くらい手が入ってまして、1回目は広島大学25周年史の段階で何種類か抜かれて整理された。整理されたというか、25周年史に関係のあるところを抜いたということがあって、1回抜かれている。もう一つは、国立教育理念研究室長の渡部宗助先生が一回見に来られて、マイクロに撮られたんです。教育史ですから、中央教育審議会だけは関心があったようで、中央教育審議会の書類は抜かれて、それが大学教育センターに置かれたという経緯があって、事実上、同じ大学内でも分散した形になっています。

そういう形の中で徐々に整理を始めていったわけですが、90%ぐらいは把握したのではないかと思います。2ページに全体像があります。書籍に関しては広島大学が中心です。それから広島修道大学。これは、広島商業大学といった時に名誉学長をされていたので寄贈されて、日本女子大は娘さんとの関係、独協大学、国立国会図書館、労働科学研究所、富士政治大学校附属図書館、横浜市という形で書籍は分かれて、多くは生前贈与です。亡くなられた後のものは、労働科学研究所と横浜市史のものです。

文書は3つに分かれて入っています。3つと言っても、法政大学の大原社会問題研究所のものは100文書程度です。ほとんどが森戸事件関係のもので、写真類が中心です。それ以外の文書は、大きく言って2つに分けられています。全体像から言うと、三分の二が広島大学、三分の一が横浜市という形に分かれています。どうして分かれたのかというと、広島大学にあるものは、生前贈与されたものと、もう一つ、目録が後で含まれているんですが、新たに奥さまからいただいたものです。奥さまからいただいたものが1万500点ぐらいありまして、戦前の、いわゆる労働運動関係の書簡だけでも1,000通。賀川豊彦から大杉栄、戦前の労働運動史関係の人達が全員並ぶという書簡群で、戦後の書簡も2,000通ありますし、あと写真などいろいろなものがあるんですが、そういうものをいただきまして、あとに追加されるわけです。そのように生前贈与と遺族関係のものですが、横浜市史の場合は、いとこのところにあった史料で、奥さまも知らなかったんです。その方が横浜の在住だったということから、開港資料館から横浜市史編纂の時に、それじゃ

いかんという形で、横浜市史の人達が整理を始めたという状況です。

史料群は、大きく分けると戦前のものと日本社会党関係、それから閣議関係です。片山、芦田内閣期のもの。それからその後の大学長時代のものと、中央教育審議会関係という形で来歴に沿って色々あるわけですが。戦前のものが少し割れています。たとえば、南原繁や大内兵衛の書簡の一部が横浜市史に入っています。その数倍のものがうちに入っている。抜かれて横浜に入ったという感じですね。それから、日本社会党関係のものが横浜市史に入っていて、日本社会党の時期という、教育刷新委員会の史料が広島大学が持っている。閣議関係は全部うちが持っている、文部大臣としての所管文書、閣議の資料は全部うちが持っている。中央教育審議会関係が3対1ぐらいの割合で、1が横浜市史に流れているという形に分かれています。その間の講演録は、八割方をうちが持っているんですが、残りの二割は横浜という形で、非常に分合した形で割れています。それを総体的にまとめなければいけないということがあるんですが、横浜市史の方では、事務レベルでは話がついているんですけども、公開という形にあたっては、マイクロフィルムで公開しようという話もあるんですが、最初、お金がなかったので会社を真ん中に立てたために、横浜市史側が、商業ベースでやるのはどうかということになりましたので、そうではないんだ、五十周年記念事業の一環としてやっているんだということで納得していただいて、共同的にやっ行って行こうかなという気運が高まっている状況だとは思いません。

具体的には3ページを見ていただければ分かるんですが、現在整理中で、大きく広島大学の史料を二つに分ける事が出来ます。つまり公文書類を中心とした生前贈与のものです。

それから遺族のほうから史料をもらったんですが、これも図書館に寄贈という形をとらずに、森戸文書研究に寄託という形にしました。これはご遺族とも相談しているんですが、理由があります。やはり広島大学の初代学長だということがあって、来年の11月が広島大学新制五十周年記念で、私も広島大学五十年史の編纂委員会の専門委員で幹事になっているんですが、五十周年記念事業の一環として位置づけられたんです。私としては森戸文庫とか、記念文庫みたいな特殊文庫をつくらせたい。できればそういう研究機関も付随してもらいたい。現在、森戸さんの三番目の奥さんですが、富仁子さんという82歳でかくしゃくとされている方ですが、その方が松下電気の外郭団体の一つである松下視聴覚教育研究財団の副会長をされています。会長は元文部次官の木田宏さんで、この間、木田さんにもお会いしてきましたんですが、財団のほうから、森戸研究をやってくれるのは非常にありがたいということで、来年から3年間にわたって、委託経費を100万円ずつもらうということもありまして、そういう形で、広島大学の特殊文庫化を図っているものですから、

正式な寄贈を延ばして、特殊文庫にする。できれば、今、大学史をやっているものだから、大学史で集めている史料もあわせて、公立大学では一つもないんですが、文書館化すればと考えています。

資料3ページから5ページにわたって整理をして、内容的には、細かく分類しますとこのようなものがあります。整理番号で1-1という形で、日本社会党関係は一文書しかありません。憲法改正関係は速記録みたいなものが中心で、大した資料ではありません。教育刷新委員会は議事録が出ているんですが、会議のときに配付された資料です。これが対という形で、刷新関係の資料があります。それから教育使節団関係の資料がある。あとは雑多なものです。

文部大臣期のものとしては、閣議関係であげていった書類です。それから、文教委員会や新学術体制、新日本国民運動とか、公職追放関係も含めて、彼が関係したものです。日教組だとか諸団体関係、「文化」関係ということで資料があります。

閣議関係は、「0」と書いたのが、後で読んでいただければわかるんですが、閣議の議事です。たとえば定例閣議をやるときに、きょうは何をやりますとってて包を渡されてそこで審議をするんですが、その審議のときの一袋ごとの資料が残っているわけです。閣議議事で一番重要なのは、閣議のときはメモをとってはいけない習わしだそうですが、森戸さんは非常にきれいにメモを残されていて、加藤はこう言ったとか書かれているメモがあるために、閣議の議事録に相当するものになります。それがどのような意味があるかということに関しては、報告すると、ただでさえおしゃべりだと言われているかぎり、これを話すと1時間かかってしまいますから、それは読んでいただくことにしまして、あとは外務省という形で、案件ごとに袋詰めされて、そのままこういう形で並べかえたものです。

それから広島大学関係。日米の文化教育会議、ユネスコ、IAU、中央教育審議会。中央教育審議会は私ではなくて、羽田さんがまだ整理していて、私も把握していないんですが、育英会・能研・放送教育関係、その他という形になります。

書簡類は、ここに入っているのは大したものはありません。書簡類という形になりますと、7月28日と8月25日、8月28日と、3回に分けて遺族から新たに資料提供をいただきました。

伊藤 今言ったのは、新しいものを含めてではないんですか。

小池 違います。これは前の分です。私の腹案としては、森戸文書を所蔵に分けて考えていて、一つは「MO」とわれわれは読んでいるんですが、森戸のMO、こちらは辰男ですから「TA」と分けて、所在によって史料を分けて、そのかわり8ページのような形で目録をつくっています。細目録です。文書一つ一つに関して、年月日と起案、発信、受信までやって、形態と備考までつけて、一文書ごとに全部これを行っています。これだけきれいに整理すれば、所蔵形態で分けていても、ばら

して入れなくても全体像がわかるだろうということを念頭に、所在ごとに分けるという形で整理することにいたしました。

現在、粗整理は終わったんですが、目録とりが全然始まっていないのが、7月28日付の文書です。書簡が2,300点ありまして、1,000点がぜんぜんの大原社研時代のもので、これを見てちょっとおもしろいと思ったのは、戦前の労働運動のセンターというか、情報の中心地が大原社研だったことがよくわかるんです。あと、片山、芦田内閣期の書簡が中心となります。講演原稿は3,000と書いてありますが、実はその倍ぐらいになるんじゃないかと踏んでいます。それと日記。総点数は7冊です。昭和30年、40年の断片的な日記です。手帳は20冊あります。ノートは、ここに書いていませんが、森戸さんは家永裁判の国側へ弁護人ですから、そのノートが3冊入っています。それから、そのときの講演だとか一括書類も入っておりまして、国側弁護人の資料としては秀逸のものだろうと。出ていませんから、そういう点では非常におもしろいと思っています。それから、スクラップ・ブック、ILO・ユネスコ関係、国際大学協議会という形で入っています。ご遺族から履歴関係もいただきました。

次に、8月25日と28日にいただいたんですが、25日の分は森戸さんが貸金庫に置いていたものです。クロボトキンの署名入りの本があったんです。そういう意味では史料的な価値というよりも、おもしろい内容のものも入っています。それから、ここには出していませんが、8月28日付で、3番目にいただきました。これは広島大学と労働科学研究所と奥さんのところに同じものが3つあるものです。彼の講演録があるんです。講演をしたときの抜き刷り集です。これを労働科学研究所がワンセットつくって、何冊か同じものがあったものですから、それを3セットつくって、そのうちの1セットが労働科学研究所が持っていて、1セットが広島大学、1セットは奥さんが持っていた。その奥さんが持っていた1セットをいただきまして、研究会で所蔵しているという形です。

現在、これを整理すると同時に、森戸研究というのをなんとか立ち上げて、広島大学が中心という形で進んでいきたいと考えています。長らくお話ししましたが、あとはご質問ということで。

伊藤 欲求不満でしょうから、ここに具体的に挙げている史料について少し説明したらどうですか。

小池 簡単に言いますと、極秘となっている「史料1」、8月24日の午前10時の定例閣議の目次です。つまり、こういう形態で入っているわけです。極秘があって、史料ありというものは史料があるわけです。「閣議」と書かれた袋に全部入っているわけです。これが目次になっていて、本当はメモをとっちゃいけないんですが、だれが参加したか、退席者、欠席者、栗栖長官がこんなことを言っているとか、そ

ういうことを書いている書類です。

伊藤 だけど、これは欠席者、森戸と書いてある。

小池 欠席者、森戸と書いてあるんですが、これは森戸の字じゃないんです。これは代理で出た人がいるはずで、そういう形でもらったものだと思うんです。

おもしろいんですが、森戸は、自分の出たものにはちゃんとサインが入っているんです。これは森戸と書いてあるけれども、メモ書きがあつて、だれかが代理人で出て、そのときにもらったものだと思います。ただ、彼はきれいにそれを揃えているんです。その点で、いい人だなあと思うんです。

それから、「史料2」と書かれたものは公文書館にあるものです。これは政令201号なんです、その本旨に当たるわけです。そして、次のページを見ていただければ、これが廃案になったんだという形になるわけです。そして執行案に入ります。

伊藤 今の「史料1」の前のほうに「史料2」「史料3」というのがあつて……。

小池 これは、慌てたので持ってくるのを間違えました。本当は森戸文書のものを持ってこなきゃいけなかったんですが。

伊藤 「史料2」「史料3」というのは……。

小池 これは「史料2」「史料3」を打ち込んだものです。本当に出さなければいけないのは、かつて日本憲法五十周年で憲政記念館で森戸文書を出したんです。そのときの通達案があるんです。201号ではあれを出さなきゃいけないんです。要するに、森戸文書の価値というのは、閣議の決定に関しては「史料2」「史料3」みたいに、公開されているのはこれなんです。公文書館の公文別録に入っているのはこれで、実際に閣議の決裁で出されたものはこれなんですけれども、この過程、たとえばこれも削除が入っていたりするんですが、この前の審議過程のものが入っています、今、閣議が空洞化されていると言われていますが、芦田内閣や片山内閣のときは閣議の修正が多かったんです。次官会議へ上がっても、結局、閣議でものごとく修正が入るんです。そういう意味では閣議が機能していたんだとよくわかるんですが、その閣議での修正の過程がよくわかりまして、その史料として森戸文書は価値が高いんです。特に、だれが修正させたのか、公文書館所蔵の閣議史料ではわからないわけです。修正はされていますが、修正されるに当たって、書記官を含めて成案をしたときの決定ですから、だれがこれを言って問題としたのか、森戸文書ではよくわかる。つまり、修正のところに名前が書いてあるんです。「鈴木」や「一万田」の名前が書いてあることによって、だれの手によって修正されたのかわかる。特に、政令201号の執行過程では、日本社会党がそれを読みかえて、なんとかうまくやっていたところ、ところが民主党や、特に芦田の意思なんです、現業の公務員のなかに、2,000人も専従の実態があったわけで、つまり実態数もそれまで

全く把握できなかつたと言われているんですが、その2,000人というのが出ていまして、そんなことがあれば非常に問題じゃないかというやりとりがあつて、打々発止があつて削られていく過程で、結局は日本社会党は無抵抗なのですが、そのことが、加藤勘十さんが頑張つたんだとよく言っているんですが、201号に関しては非常に史料的価値が高いということです。それは201号だけですが、片山内閣がつぶれるのは、公務員の基準俸給の問題がありますね。あれもきれいに揃っています。1,200円が1,800円になると非常にめめますけれども、森戸は政調会長だったこともあつて関心があつて、それもきれいに揃つていまして、そういう点で、閣議関係に関しては史料的な価値が非常に高いと言えるだろう。

教育刷新委員会もありますし、広島大学のときも、中央教育審議会に関しては、史料がほとんどすべて揃うという意味では……。彼は長いですしね。もうひとつは、彼の思想的系譜が非常におもしろい。そういう意味では、戦前は社会運動の中心で、戦後が脚光を浴びて文部大臣になるわけですが、よく、そこから右傾化したと言われていんですが、彼がそのときどきであらわす社会民主主義とか社会主義というノートがあるんです。それも10年おきぐらいに、もう一回勉強し直すようにしてノートをつくられているんですが、記述にあまり変化がないんです。つまり、社会民主主義者であつたわけだから、彼の政治的な意思や座標軸はずれていないと思うけれども、周りがずれていった過程だろうと思うと、思想史的に見てもおもしろいんじゃないかと考えています。

そういう資料として森戸文書を整理していこうと思つているわけですが、広島大学の初代学長ということは、新制広島大学ですから、戦前の文理大学、高等師範というところを強引に総合大学化したという経緯のなかの初代学長のものですから、広島大学の総合大学化の過程は非常にめめまして、大物輸入論が地元財界が出て、文部省のお声掛かりで彼が行く形になつたものですから、森戸さんに対してあまり快く思わない人もいます。それから、戦前戦後の過程でいくと、反共というか、共産党に対して非常にネガティブですから、その関係で、大学のなかには非常におもしろく思わない人もたくさんいます。

広島大学の校章はフェニックスなんです。原爆によって焼かれてしまったから、それから不死鳥のようによみがえらなければいけないんだということでフェニックスを打ち立てる。彼が非常に偉いと思うのは、図書館も焼けますから本がないわけですから、日本の大学長として先見性があつたと思うのは、彼は最初から最後まで国際大学協会の中心ですよ。同時に、初代学長のときから世界各国の大学に手紙を書いて、本の寄贈と種子や苗木をもらうんです。本を大学に入れて、種子を学内に植えていくんです。自分で手植えをしていく。それから、広島大学のカラーを赤にしようという意見が戦後非常に強かつたんです。戦前は国体学を中心に、

国体学の講座があったんですが、戦後は急に左翼化しまして赤にしようという意見があったときに、広島の場合、原爆の炎で焼き尽くす赤だから復興を意味しない。復興は緑だといって、緑にするんです。僕は、そういうところが非常に偉いと思うんです。

森戸文書の整理事業は、五十周年記念事業に位置づけられたんですが、現在私の公費でまかっています。ただ、うちの学部長が後援してくれていて、「どんどん赤字をつくれ」と言ってくれているので、「どんどん赤字つくります」と言っています。ことしは200万か300万ぐらいの赤字にしようと思っています。

あまりにも量が多くなったので割愛したんですが、著作目録や履歴など調べたものはもってきてはいます。以上です。

伊藤 ご苦労さまでした。おもしろい充実した報告でした。

どなたでもご自由にご質問ください。

中見 森戸の最後の金庫のものにクロポトキンの本があって、サインというのは、だれあてのサインですか。

小池 だれあてではなくて、クロポトキンの名前だけ。

中見 クロポトキンに会った日本人は少なく、有島武郎が会いに行っています。

小池 そうなんですか。有島武郎と森戸辰男は仲がいいんですよ。

中見 クロポトキンと会った日本人は非常に少なく、有島はアメリカに留学した帰りに、わざわざクロポトキンに会うためにロンドンへ行ったんですよ。つまり、有島の思想とクロポトキンは同じアナキズムで、森戸は、クロポトキンの日本における最初の本格的な紹介者。だから、クロポトキンに会ったときに有島がもらったものを森戸がもらったと……。もしも「有島」と書いてあったらめずらしいなと思ったんですが。クロポトキンはロシア革命直後にモスクワで死にます。

小池 ちょっと詳しく見てみます。多分クロポトキンの名前だけだったような気がするんですけど。ただ、有島と森戸は終生非常に仲がいいですね。書簡も多いです。最後にもらった書簡で、森戸が金庫のなかにしまわれていた書簡は3通あるんです。一つは大内兵衛です。大内兵衛とも終生仲がよかった。思想は違ったんですが、なぜかずっと仲良かったということがあって、もうひとつは後藤新平の書簡です。後藤新平が収監されて出てきたときに、七転び八起きだという形で当たり障りのない手紙なのですが、これが1通。もうひとつが有島武郎で、これは慰労のあり方が、非常にねぎらった有島らしいきれいな字で、その3通が金庫に入っていたんです。戦前、左翼と言われている後藤との関係があって、その書簡があったのはおもしろいものではあるんですけど。

伊藤 その書簡のなかで、後藤新平没後に2人とかかわりのあるような人からの手紙はないですか。

小池 まだ数を数えた程度で詳しく見ていないもので。

伊藤 整理する場所はどうしているんですか。

小池 図書館の2階にグループ研究室があって、そこを図書館の好意で借りているんです。

伊藤 では、ものもそこに置いてあるわけですか。

小池 ものは、図書館の特別閲覧室に置いてあります。

伊藤 閲覧室？

小池 はい。特別閲覧室という地下書庫みたいなところがあって、貴重書を見る特別の部屋なんです。ちょっと縦長の整理箱なんですけど、それで140箱ぐらいあります。そして、後でいただいた書籍類だけで300冊ぐらいありますので、全部合わせればだいたいそのぐらい、非常に大きな量になります。

伊藤 書籍は、図書館が何かしているわけですか。

小池 これまで整理したのは社会問題と社会主義関係です。残りの書籍が残っていたんです。それが3,000冊ぐらいあります。

伊藤 図書館が整理したものは図書館にばらけて入っていたわけですか。

小池 特殊文庫化しています。ただ、これも森戸じゃないかというものもあるんです。もう一回見直さなきゃいけないんですが、図書館がことし科研で公開促進費をもらったんです。最終的には特殊文庫をしたときには全部やり直しというふうには話しているんです。その書籍は、教育関係、それと戦後の社会問題、労働組合関係です。あとは写真類などもたくさんいただきましたし、いろいろ見ていけばおもしろいものはあると思うんです。他に明治初期の写真、銀板写真などもありますし、写真史上でもおもしろいものはたくさんあると思います。あと大原社研時代の写真とか、結構歴史的な価値のありそうな、大会の写真などもあります。

伊藤 写真などは註釈がついていますか。

小池 ついていません。

伊藤 川村茂久日記は全部復刻したいということを前から塩崎弘明君が言っていて、僕も、仕事が一段落したらやろうかと言っていたんだけど、一段落どころじゃなくて前より増えたから、大分順位が下になっちゃっていますが、これも課題なんですよね。

小池 この日記はおもしろいんですけどね。特に、本省サイドがどうだったのかよくわかる日記で、おもしろい。

伊藤 あと、彼は外務省をやめて、非常にあやしげな動きをするけれども。

小池 そのあたりが塩崎さんが一番興味あるところだと思います。あと、日本外交協会あたりの史料もあるんですよね。僕はあまり詳しくないんだけど、一番詳しいのは、敦賀女子短大の多仁照廣さん。その先生が、本当は近世の外交をやっている

た人だけども、今、日本青年団史みたいなのを書いている関係で日本外交協会など協会系が強くて、そのあたりの史料がまだあるという話は聞いているんです。僕も外交史料館にいたときは結構関心を持っていたんですが、広島に移ってからちょっと忙しいものですから失念しているんですけども、それがどうなのかというのが大きな問題だと言っていました。

伊藤 当面、森戸で精一杯ですね。

小池 実際、整理もきついですね。

伊藤 かなり長年月の事業になりますね。

小池 なるでしょうね。

伊藤 お金をなんとか獲得する方法を考えなきゃしょうがないでしょう。

小池 来年から 100 万円ずつはもらえる予定ですが。

伊藤 もうこれで広島大学から動けなくなったね（笑）。

小池 そんなうれしそうに言わなくなっちゃっていいじゃないですか。老いた父と母がいますから、東京に帰ってきたいのはやまやまなんですけれども、正直言って、最短でも三、四年はかかるでしょうね。

伊藤 これだけの点数があれば、希望的観測だと思いますよ。

小池 ただ、もう半分は整理が終わっていますから。目録もできていますので、半分はできているんですよ。

伊藤 労働力はあるんですか。

小池 学生をリクルートして、8 人ぐらい、薫陶したやつがいて、非常によく仕事をするんです。手弁当でやっていたときから 3 人ぐらい、昼飯だけおごってやって整理させたというグループがいて、そこで 8 人ぐらい育てましたので、それがなかなか優秀なんです。マックス 24 人ぐらいまで増やせるようにしてあります。それは学生が組織しました。自慢じゃないですけど、なかなか優秀です。整理はきっちりやります。

伊藤 自慢ですと言ったほうがいいんじゃないですか（笑）。

小池 自慢です。学生にしては、本当にきっちりやります。日本史の者が半分、半分は夜間の。僕が夜間で教えたときになぜか来て、あとうちのゼミ生でやるとマックスが 24 人ぐらいになるんです。

季武 もうすぐ一部は出版されるんでしょう。

小池 森戸は閣議関係だけで、文部省のときのものと同様関係だけで、五十周年記念事業で出す。

伊藤 それはどうやって出版するんですか。

小池 マイクロを考えて居ります。

季武 僕は後藤新平で頭がいっぱいなんですけど（笑）。確かに、第 2 次山本内閣

のときずいぶんやっているんじゃないかという気がするんですが、これに出てくるのかなあと思って。

小池 ヨッフエなど関係ありますから、ソ連人脈と森戸が接点を持てば、先生にも広島に来ていただいて、整理をお手伝いしていただくことになるかもしれません（笑）。

季武 藤田勇でしたっけ。

小池 今、大阪市立大学法学部の中北浩爾さんのところが清水慎三の書簡集をつくるという話がある。清水慎三は社会党時代に森戸秘書でしたから、西川君経由で僕のことを調べて、「見せてください」というから「いいですよ」と言って、1回見に来られた。清水慎三の書簡集ということで森戸の文書を使ってもいいということにして、そうしたら清水慎三のご息の方からお手紙をいただいたりして、あるいは政治秘書という形で広島大学と一緒にいった西村博さんという方がいらっしゃるんですけども、今もご存命で、その方が持っている戦後の社会労働関係の史料も一括していただくという形で、史料が少しずつ、ほかにも集まりつつあります。

伊藤 一つ集まると、どうしても一緒に集まるんですね。

小池 自分としては、将来、森戸記念文庫という文庫をつくって、公共的な研究教育機関にして、ご遺族も含めた人を「森戸会」という団体をつくって管理運営していきたいという腹案は持っていて、広島大学の文書館という形で進めたいのです。今は情報がはやりで、文部省から情報センターは金がつくということなので、地域情報資料館、広島近辺は酒づくりのところですから、近世、近代のつくり酒屋の史料がたくさんあるんです。それを精力的に集めている、森戸文書研究会に入っている勝部真人さんという農業史専門の先生と、頼祺一さんといって文学部の近世の先生なんですけれども、その先生を頭に、なんとかそこで打ち抜こうと、ワンフロアでもいいからとろうと考えているんです。その際、本当は面倒くさいんですけども、これまで森戸文書では地元の新聞ですが3回出しましたし、テレビも、私は広島大学では現代政治論が担当なものですから、この間の参院戦の選挙解説をしたんです。当たりましたから評判よかったですけれども、その中国放送に、「頼むから森戸をテレビにのせてくれ」と頼んで、撮影に入ってもらったりという広報活動をやって予算獲得をねらっている段階なんです。

伊藤 「小池ばかりいい思いをして」という逆効果だってあるかもしれない（笑）。

小池 反動的な人は逆効果に感じますよね。

中見 森戸さんのはこれで全部ですか。

小池 全部です。ただ、ご遺族でも、今の奥さんは3人目なんです。1番目の奥さんは大原社研時代に離婚されていて、2番目の奥さんは岸子さんといって、その奥さんが広島大学に来られて、そのときのご長女さんが、広島に檜山洋子さんという

方がいらっしやいます。

今一番問題なのは、外務省の外交史料館はこれから岐路を迎えます。20年の8月15日で編纂事業をやめるとのことです。問題なのは、私は吉見義明さんの慰安婦の史料に対して批判的で、ああいう全体像に還元できない史料集がたくさん出てしまった。ああいう史料がたくさん出てきたのが非常に問題だと思います。反対にマイクロ出版で現物が全部出てくることになったものもある。このため編纂物の価値が非常に低くなったんです。ところが、編纂物は当時の歴史認識も含めて再現していくという編纂者の非常に強い努力と、分析視角を明確にすることに意味があったんです。だから僕と松重さんは努力して、どういう分析視角でとったのかということとで解題を書いていたんです。どうしてこの編纂が成り立つか、ということを書いていたんですが、それがなくなってしまって、だから今、外交史料館では編纂概要みたいな形に変わってしまった。ですから、欧米関係などは一件態の史料のなかから交渉過程の来往電報だけを抜いた非常に安易な編纂物に変わっています。背景には、今の歴史学会に史料集を批評できるような基盤がない。史料を分析する能力がない。だから批判ができないということも実態としてあって、そのことが長期低落という状況になった。

そして20年8月以降はインターネットで公開すると。どうやってやるのか僕は理解できませんけど。どうしてインターネットで公開できるのか。記録公開を全部インターネットで行う予定だそうです。戦後の公開されている外交記録との関係で戦後の歴史編纂ができないということがあって、外務省は、インターネットに乗せれば公開性が高まるということに代替えしたんだろうと思いますが、量的には減るし、内容的にも今のままという形になるでしょうね。

伊藤 インターネットで公開するという事は、画像として出すということですか。

小池 そうです。

伊藤 大変だなあ。

小池 今でもマイクロで20本とか30本、多いときには50本ぐらい出すわけですから、それをどうやってインターネットに流せるんだろうと、非常に理解に苦しむんですけどね。（第10回終了）